

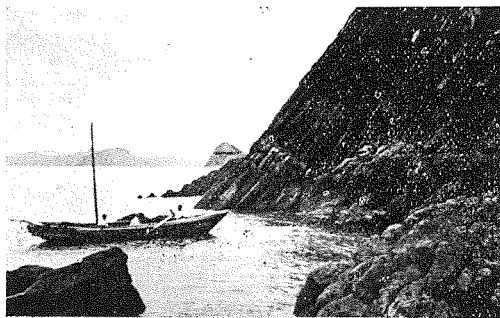
北海道十日の旅

廣井博士の逸話を探ねて

(第一信より第三信までは都合にて省略)

第四信 船は函館港に入る (七月十三日)

函館が近く見える、右に突出してをる山が大變都合の好い目じるしだ、あの上に砲臺があるのだと苦小牧の人が教へてくれた、山の下の方の傾斜地に建物が段々に列んで港の町らしく見えて来た、山の下から一本の防波堤が出て其突端に赤燈臺が直立してをる、ハ、ハ此の防波堤を廣井博士が造られたのだと思ふ、タツター本の防波堤であるが大變ウマク出てをるので港内の波の静かな事に感服し



(1) 浅虫温泉、湯の島材木岩の景

た、連絡船は横腹を小蒸気に押され乍ら岸壁に横付になると、船尾のレールは貨車航走設備の棧橋にピッタリと接續する船から、貨車が出ない間に我々は上陸してすふ。

長廊下を通つて驛の待合室に入る、駒ヶ岳噴火の繪ハガキや寫真を購ふ、小キレイな食堂があるので列車中の食堂よりは好いだらうと思つて中食のランチを取つたが、トテもマズかつた。一圓二十錢の此のランチで北海道最初の印象を悪くした。

第五信 駒ヶ岳の白雲去來

函館から北へ北へ汽車は進む、郊外からの人家の板屋根、板壁のバラックのみ列んでをるのは意外だつた。

大沼は確に良景だ、汽車の窓から兩側を展望すると、浮島の様な小島が各所に點在して何れも樹木が茂つてをる、風でも吹く小島が

動き出すかと思はれる様だ、鐵道沿線の雜木雜草と荒板造りのバラックばかり見て来た眼には大沼公園は旅客を慰むる何よりの景物である。

ドンヨリと曇つた白雲の間から右手に駒ヶ岳が見えて来た、先日の大爆發を偲ばれる。

あれが噴火口のあたりだらう、白雲去來して物々しい光景だ、未だ患部が癒えないと云つた状態である。裾野の緩いスロープには熔岩の流れ出たのが白砂の如く見える、山の中腹には樹林の緑も残つてをるが一帶に火山灰を

被つた蹟がハッキリ見える、熔岩の流れは汽車の線路から五六丁の處まで来てをる處もある。爆煙の昇登する事一萬六千メートルに及んだと云ふ、其の凄い地下の爆力は今何處にある、實に静寂なものだ、汽車の窓からは被害を受けた物の形を一物も見うけない。せめて驛前にでも當時の記録を簡単に立札にでも出して置いたら旅客の印象を強からしめるものと思はれる。

第六信 小樽 夜景

やつと小樽に着いた、右手の山、左手の街路、高く低く電燈が輝いてをる初めて町らしい都會らしい處に來た気分がする。驛内も賑やかな人ごみである、我が今回の北海道行に最も重大な關係地であるが先づ汽車で素通りする。

第七信 夜の札幌街

午後十時札幌驛に着、二等車の客は殆んどガラ空となつた、出迎の人が相變らずホームに混んでをる、改札口を出るこ片側に提灯が數十もズラリ列んでをる、各旅館の名をハッキリ現はして靜肅に整列してをる、東京では見られない行列だ。二番目の提灯が山形屋と書いてある、之を呼ぶさ春の低い男が列を離れてアイサツに来る。

夜の札幌街は電燈が少い、兩側の商店も相當な照明を使つてをるが道路が廣すぎるので路まで届かない。電車も通つてをる、乗合自動車も通つてをる、タクシーも時々走る、道路が廣いのでその位の交通では目立つて見えない、一帶に街は靜だ。

五分程で山形屋に着いた、大通りの左側で舊式な日本造り、何處もなくガツシリとした家だ、札幌もやつぱり蒸し蒸しする、室に扇風機も備へてない、直に服を脱いで浴室に入る。湯槽の中から聲を掛けた人がある、見るに松本亟治博士だ。松本博士は野村龍太郎、國澤新兵衛兩博士の一行と俱に函館から別れて長輪線を廻つて三十分程先に此家に着かれたさうだ、別に申合した譯ではないが、寢臺車も同じ旅館も同じになつたのは奇縁と云ふべしだ。

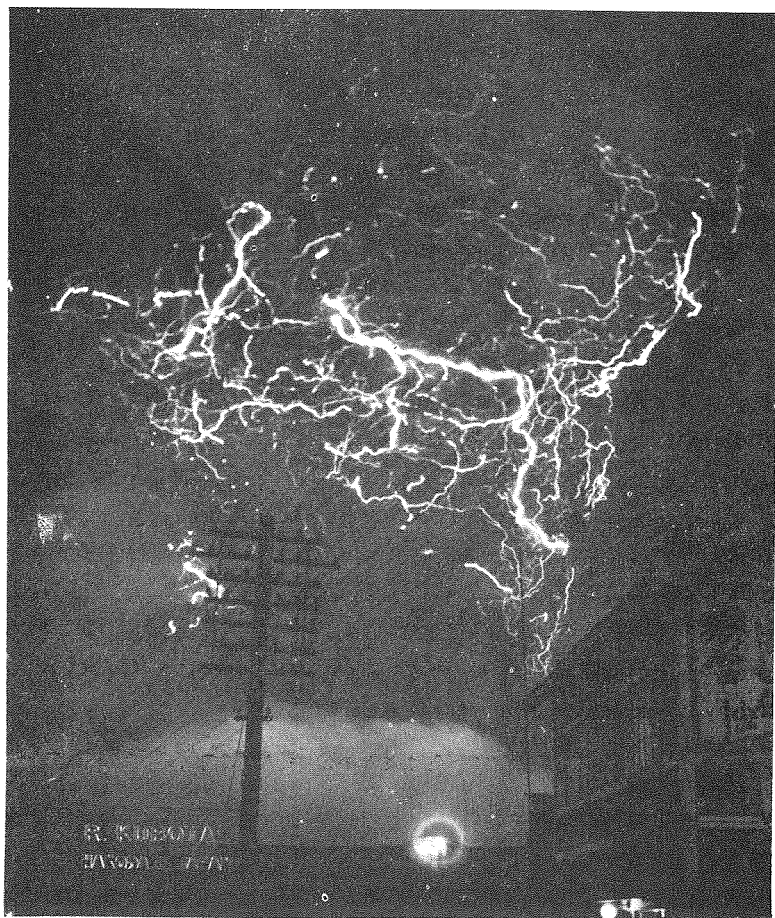
今晚は山形屋も客が混んでゐる、七月末から八月九月が札

幌の旅館の書入れ時ださうな、廊下を走る女中の足音も騒々しい、斯んな時には録な待遇はうけられないものさ覺悟して寢に就く。將に十一時。

第八信 札幌の日曜日

北海道に初めて一夜を明した朝である、それが七月十四日の日曜日である。フト枕元の新聞を見るに一隅に各教會の案内が出て居る、中に札幌獨立教會の禮拜説教が午前八時からある。私は早速食事して車を馳らせた、廣い散歩道に面したコンクリート造りの堂々たる教會堂であつた。

石の階段を上るに讚美歌の合唱が漏れて來



(2) 胸ヶ岳爆發夜景、烈々たる大火柱の中に閃く巨大なる電光の狀景
爆發當日午後七時森驛にて撮影す。

る、堂内は五十人程の男女が席を別にして立つてゐる、壇上には一人の中年の牧師がフロック姿で謹厳な態度で直立してゐる、高い天井、廣い講堂、少い人数、自分は壇上に一禮して前から三番目の席に入つて瞑目して立つてゐた、突然後の方から一老人が来て小い本を二冊私の手に押し付けた、

「之を御らんさい」

と言ふた。見るま手アカに汚れた古い聖書と讚美歌の本である。

有りがさう……………と云つて私は此の手アカに或尊嚴を感じた、それから隣の人に何頁かを聞いて其讚美歌の本を開いた、而して私も一同の歌に和する様に唱ひ始めたが、調子は合はなかつた。

讚美歌が終り、牧師の祈禱が終り、それから聖書の講義が終つた、其讚美歌や聖書の言句が何れも廣井博士の信仰に觸れてゐるものばかりの様に感じられた。

私が今朝突然此の教會に来たのは、此の教會が創立以來故廣井博士と最も深い關係のあるもので、一度建物の様子を見て置き度い故であるが、教會に餘り這入つた事のない私は生れて今日が三度目位と思はれるが、非常に深い印象を得た様に思はれた、私は手アカのついた粗末なバイブルを返し度くなかつたが、別に入口の卓上にあつた新しいバイブルを一冊求めて今日の記念にする事にした。

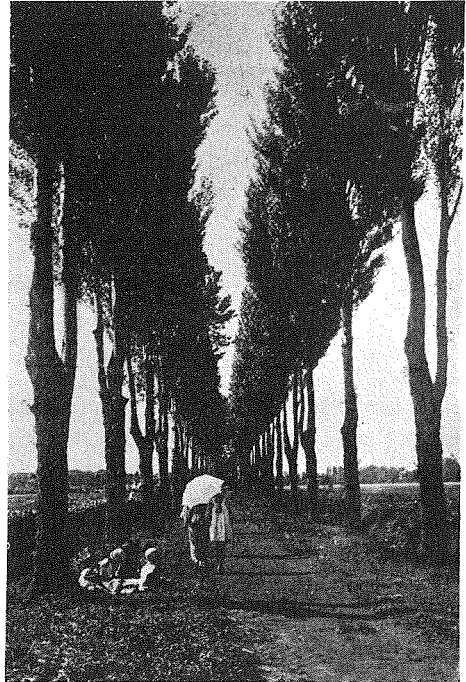
「アナタはドナタですか……………私は〇〇ですが」牧師は云つた。

私は之に對して初めて名のりを舉げて廣井勇博士の傳記資料を蒐集に来た事を話した。

「それでは此所に宮部さんが……………」と傍の老紳士を紹介された。

宮部金吾博士！ それは既に「廣井勇君小傳」を書かれて、廣井博士の人格を第一着に天下に紹介された人で、今は、北海道帝國大學の名譽教授として幾多の後進から慈父の如く慕はれてゐる學界の國寶である。

宮部博士は廣井博士と俱に札幌農學校を明



(3) 札幌郊外初夏のポプラ

治十四年に卒業された同窓の親友である。私が今回の北海道行も宮部博士を最大の目標として來たのであつた。

私は今朝の奇遇を感謝しながら宮部博士に改めて明朝の會合を約して會堂を出た。

(岡崎生)

駒ヶ嶽の大爆破

北海道の活火山駒ヶ嶽(海拔1,140米)が、6月17日午前大爆破し、200尺の火柱天に押し噴煙 3,000 米に達して熔岩物凄く噴出殆んぞ全山を覆つたこの事件は當時各新聞紙の詳報した處であるが、降灰は噴火口より約13里距てた尾札部村、8里距てた白尻村にまで及び、降灰及直径1寸餘の降石が約1尺厚程積り樹木農作物等全滅した程であつたと云ふ。(本號表紙参照)